

## 令和6年度 第1回総合教育会議 議事録

### 1 日 時

令和6年11月12日（火） 午前10時から午前11時まで

### 2 場 所

市川市役所第1庁舎5階 第4委員会室

### 3 出席者

田中 甲 市長、 勝山 浩司 教育長、 山元 幸恵 教育委員、 大高 究 教育委員、  
広瀬 由紀 教育委員、 田中 大介 教育委員、 駒 久美子 教育委員  
関係職員（17名）

### 4 議 題

議題1 令和7年度教育振興重点施策について

### 5 議事概要

#### ○西村企画部次長

おはようございます。

皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。事務局の企画部西村です。本日はよろしくお願いいたします。

本日の資料は、次第、そしてA3資料となります「令和7年度教育振興重点施策（案）の概要」となります。不足はございませんでしょうか。

それでは、市川市総合教育会議の運営に関する要綱6の（4）に基づき、会議の公開・非公開の決定を行いたいと思います。なお、総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第6項の規定に基づき、原則公開となっております。本日の議題については、非公開事由に該当する議題ではないと思われまますので、会議を公開することといたしますが、よろしいでしょうか。

————— 異議なし —————

ありがとうございます。本日の傍聴希望者は1名でございます。それでは、傍聴希望者が入室いたします。

————— 傍聴者入室 —————

傍聴人の皆様にお願いがございます。恐れ入りますが、傍聴に当たりましては、先ほどお渡ししました傍聴に関する注意事項を遵守いただきますようお願い申し上げます。

それでは、ここからの会議の進行は市長をお願いいたします。よろしく願いいたします。

○田中市長

皆さんおはようございます。お忙しい中いらしていただきまして、本当にありがとうございます。

ただいまから令和6年度第1回市川市総合教育会議を始めさせていただきます。

■議題1 令和7年度教育振興重点施策について

○田中市長

それでは議題1「令和7年度教育振興重点施策について」の協議に入ります。

協議に入る前に、来年度の教育の振興に係る重点施策につきまして、教育委員会からご説明をお願いします。

○勝山教育長

それでは、議題1「令和7年度教育振興重点施策について」説明します。

お手元の資料、「令和7年度 教育振興重点施策（案）の概要」をご覧ください。

こちらは、教育委員会が令和7年度に重点的に取り組む施策の案について、概要をお示したものです。

この重点施策は、3つの柱をもとに作成しています。

1つ目の柱は、昨年の総合教育会議にて市長と共有し、市川教育の目指す方向性を踏まえて策定した、第4期教育振興基本計画の方向性をお示ししております。

2つ目の柱は、第3期教育振興基本計画の令和5年度の点検・評価結果から得られた改善点をお示ししております。

3つ目の柱は、本市の教育行政が抱えている喫緊の課題についてお示ししております。

本日はこれらの重点施策の内容について市長と協議をさせていただきたいと思っております。

これを踏まえて、教育委員会では今後、重点施策を策定し、令和7年度の教育行政運営方針に反映させたいと考えております。

詳しくは、教育委員会教育次長よりご説明します。

## ○小倉教育次長

教育次長です。ただいま教育長からご説明がありました通り、資料左にあります3本の柱を踏まえ、重点施策として整理したものが、令和7年度の教育振興重点施策案です。

1つ目は、子どもたちの「生きる力」の育成です。

これから予想される変化の激しい社会に対応できるようにするには、困難な状況を自らの力で切り開いていける、生きる力が必要です。

そのために、自ら学ぶ力を育てる授業改善を行い、健康寿命日本一に資する心身の健康の増進や体力の向上に努めます。

また、幼保小一貫教育を進め、幼児教育の質の向上及び小学校教育との円滑な接続の充実を目指します。

2つ目は、多様な教育ニーズへの対応です。特別な支援を必要とする児童生徒や、外国人児童生徒は年々増加傾向にあります。個々の教育ニーズに寄り添い、様々な学びの充実整備に努めます。不登校の児童生徒は全国で過去最多となっており、本市も同様に増加をしています。不登校児童生徒やその保護者に寄り添い、学習機会や居場所の確保など、将来を見据えた取り組みや環境を整備します。

3つ目は、教職員が輝ける環境の確保です。経験の浅い教職員の指導力向上を目指し、研修の充実を図ります。学習用端末の利活用の日常化や、教職員のICT活用指導力の向上に加え、効率的な校務処理を実施するため、校内のICT環境整備を持続的、継続的に進め、働き方改革につなげます。

4つ目は、教育関係施設の環境整備です。学校が、子どもたちにとって安心して過ごせ、教職員が真摯に子どもたちに向き合うことができる場となるよう、体育館のエアコン整備をはじめ、学校の環境づくりを進めます。また、公民館、図書館、博物館などの教育関係施設は、誰もが使いやすく居心地の良い場を提供できるよう整備を進めます。

5つ目は、人生百年時代に対応した生涯学習の充実です。誰もが生涯にわたっていつでも学びたいときに、身近に学ぶことのできる環境の整備を進めます。また、人と人との繋がりや関わりを作り出せる、地域に密着した多様な学びの場を提供します。

6つ目は、市川市がもつ文化資産の活用・保護です。本市に残る貴重な文化財を未来の市民

に継承するため、指定文化財の保護と活用を図り、博物館の利活用を進めます。国府台遺跡では、国庁や国衙の遺構を確認する調査を進めるとともに、来年度本市で開催予定の国府サミットに向け、様々な取り組みを行います。

説明は以上です。よろしくお願いいたします。

### ○田中市長

はい、ありがとうございました。

提示された施策はどれも重要なものであると、捉えておりますけれども、委員の皆様方からご意見をいただきたいと思っております。よろしいでしょうか。

それでは山元委員より順次ご発言いただきまして、最後に教育長にお願いできればと思っております。

それでは山元委員、よろしくお願いいたします。

### ○山元委員

それでは私の方からは、子どもたちの生きる力の育成、特にその学ぶ力、それに伴う学力向上という観点から述べさせていただきます。

実は先日理科の授業研に参加して参りました。中学2年生が豚の血液の赤血球、白血球を観察し、そのあと担任の先生の血液の観察をしておりました。さらに3年生は金星の観察、これはなかなか面白い見え方をするものですから、それについてどうしてこうなるのというようなことを子どもたちが勉強しておりました。

血液はもちろん目の前で実際に見るとなるとみんな生き生きしていました。金星となりますと実際に観察するのは難しいですが、国立天文台が公開してる「Mitaka」というアプリを使って、最新のデータを基にした色々な天体そのものをビジュアルで子どもたちもわかりやすく、いろいろ調べられます。そのアプリを支給されているタブレットを使って、子どもたちがいろんなことを、またこちらも非常に楽しそうに調べておりました。

その研究会に参加してみてもですね、自分なりに感じたことは、やっぱり学校は授業だよな、やっぱり授業が子どもたちにとって魅力的で、その場で子どもたちが今日のこれ面白かったとか、あるいはあれ、これどうしてだろう、何か調べてみたいなという、あるいは自分でもできるかもしれない。こういういろんな肯定的な感情をいっぱい授業の中で育むことができれば、これがイコール学力の向上にも繋がりますし、それにとどまらず、自分は駄目だというんじゃなくて、自分でもできるかもしれないという自己肯定感、豊かな心、負けない心というのを、こういう授業1つ1つの積み重ねの中で子どもたちはきっとこう養っていけるんだろかなと思っております。

だから、本当に私たち教師は魅力的な授業をやっぱりやらなきゃ学校はいけないんだよなということを、子どもたちの姿を通して改めて知らされました。

そのためには、実はただ、その魅力的な授業を毎日毎日展開したいんだけど、それができない非常に厳しい状況があります。

1つはやっぱり残念ながら若年層が非常に増えてしまい、よくあるんだけども空回りしてしまう。やっぱりノウハウとか、いろんなテクニク的なものを、やっぱりこれは教育委員会、担当している指導課とか教育センターがもっともっとしっかり伸ばしていったらあげなきゃいけないなと思います。

そしてもう1つはですね、実際自分も教員のときそうだったのですが、目の前の子どもは生き物なので、毎日何かしらあるのですよ。

生活指導的な部分にどうしても追われてしまったり、行事に追われてしまって、明日の授業どうしよう、一番大切な授業が、ことによると一番最後になってしまっている。

これは現場の教師は本当に「それがつらい」という声はいっぱい聞きます。

やっぱり、本当は授業で勝負したい、子どもたちをもっと伸ばしたいけれどそれができない。とすれば、やっぱり私たち教育委員会の仕事というのは、その先生たちが本当に授業に向き合って、子ども一人ひとりを見て、大事にする授業ができるようにするということが一番大事だと思っています。

そのためにということで、今日ここにいっぱい挙がっているいろいろな政策、それすべてそこに繋がるものだと思います。例えば、ICT。実際、活用がだんだん進んできて、さっき申し上げたように、これを使えばこんなことができるんだ、それをその場において若手の先生たちみんなで共有して、私も今度はこういうふうに使ってみようということがプラスに働いてます。

いろんな環境整備を今も進めていただいているおかげで、前はすぐ止まっちゃうという意見をいっぱい聞いたのですが最近をよく動いているようです。やっぱりこれも環境整備なのですよ。

それから、非常に多様な生徒が増えてます。配慮を必要とする生徒、これもインクルーシブ、一緒に勉強することは大事だけれども、教員1人が対応できる部分って、そんな多いわけではない。すでにそれが、オーバーワークしてしまうことによって、子どもたちに不利益が生じている。その配慮が必要な子どもにも十分な配慮ができないし、いろいろな子どもたちもすごくいろんな部分で不自由を感じるようだから、そういう部分をどうやって支援するか。実際、市の方では、そのためにいろんな3S（スリーエス）と呼ばれる補助的な方とか補助教員等本当に配置していただいている、そのことがどれほど現場にとって助かっているか。それはもうやっぱり現場を見てみるとよくわかります。さっきの天体の授業をした先生、その直前

に子どもがトラブルを起こしまして、そちらに対応していました。準備はスリーエスと呼ばれる補助の先生が代わりに全部して、授業に先生が戻ってきて、授業して、またそのあとの対応のために飛んでいきました。学校はそういうところなので、やっぱり1人が背負えるキャパを今、正直超えてるところを、私たちは本当に自覚しないといけない、知らなきゃいけないなと思ってます。これは先生を甘やかすということでは決してないのです。「先生がもっと頑張ればいいんですよ。先生のためにお金をつけるのはおかしいですよ。」と言われたことが以前自分もありました。でも、そうではありません。先生たちが本当にしっかり授業に向かい合えるようにすることはイコール一人ひとりの子どもにとって最大のメリットです。それが本当大事で、そういう授業の中で子どもが認められる経験、先生にほめられた経験、それが結局、自己肯定感、生きる力、困難にぶつかったときでも自分だってできるはずだって思える力に繋がっていくと思います。

そういう意味で私たちは教育委員会としてそういうものを今もすごく考えています。さっき不登校の話が出て、私がこのデータを見たときに、あと思ったことがあるのですが、不登校の人は増えています。市川も増えています。今の環境、いろんな社会の中でつまずき、集団に適應できない子どもはこれからも増えると思います。でも、大事なのは、そこでつまずいたときに、親と子だけで、閉鎖的な中で閉じこもってしまうということが一番いけないことだと思う。やっぱりそこに専門家とか、外部の人が関わって、本人がエネルギーが溜まって1歩踏み出そうとする、その機会を作ってあげることがとても大事だと思っています。そういう外部機関と繋がってますかという文科省の調査で、実は中学生ですと、全国平均では5割強の不登校の生徒は何の支援を受けていない。ところが、市川市は4分の3、75%以上の子どもが外部機関、いろんな支援と繋がっている。

これは決して表に出てこない数字だし、別に不登校が市川が少ないわけでもないけど、でもそうやって、何でこれだけ市川は他に比べてしっかり繋がれているのかと言ったら、やっぱり中学校にカウンセラーを非常に多く配置していただいているし、あとセンターを中心とした相談機関がすごくしっかりしているし、そういうやっぱり目に見えないけど、市が今までやってきた施策が、こういうところで生きているんだなというのを実感して、大変大事なデータだなと思って見ました。

教育ってなかなかその施策とか、その努力が、表には出てきませんが、でも将来を担う子どもたちを育てるって、何ものにも代えがたい大切なものなので、今、そういう子どもを育てるために、ぜひ学校の教員たちの応援、教育委員会としてぜひ、今後も一層進めていかなきゃいけない、そういう思いが反映した重点施策であるというふうに考えています。

こういうことを市長にご理解いただければと思います。

## ○田中市長

ありがとうございます。

それでは、大高委員。よろしくお願いします。

## ○大高委員

よろしくお願いします。

自分は医療側から意見を述べることになりますが、まず施策の一番上の体力。要は子どもの健康ですね。健康というのはすべての根本になると思います。勉強にしても運動にしても健康でなければ、この話自体成り立ちません。健康ということがやっぱり、まずは大事なのですけれども。何度も述べたように今子どもたちの体力、健康は明確に落ちています。

1つはやっぱりコロナがすごく影響しています。我々医療業界にとっても、本当にすごく大きいいろいろすべてが変わったと言っても過言ではない。今は落ち着いているとはいえ後遺症の問題もあります。子どもたちにとってはやはりコロナで閉鎖的になったことによりスマホやタブレットと一日中らめっこする、睡眠時間も短くなり、それからこれももう何回か言いましたけど今流行のイヤホン。視力が悪くなり、聴力が悪くなる。

もう1つは屋内にこもったことにより、太陽光に当たらない。太陽光に当たらないというのは人間にとって非常に免疫力を下げる、免疫力がつかなくなる。人間すべてが免疫力と言っても過言ではないという、これも前回お話したかもしれませんがやはり外で運動する、外で遊ぶ。太陽に当たるということはいかに大事か、何校か視察しましたけどもやはり各学校そういうこともちゃんと分かっている、外での活動を重視されている。私がいまさら言わなければいけないことではないのかもしれませんが。日本中、世界中そこはちょっと問題じゃないか。

それから、もう1つ重要なのは少子化。これはそれこそ教育委員会が論ずるものじゃないですけれども、とにかく生きる力を得なければいけない人間が増えなければ、すべてが無駄になるし、このままでいけば、中国、韓国、日本は消滅する、消えてしまう。少子化というのはやはり長い目で見れば、人口ゼロになるのです。この勢いでいけば国がなくなる。少子化に対してはどこがどうすればいいか、少子化対策大臣もいらっしゃいますし、少子化対策を行っていただけてきてますけども、結果はどうなるのか、市川市がどういうふうに、また、現状考えていただけか。それはちょっと我々、期待したいところであります。

最後に先ほど山元委員が言及されたので、簡単にですけれども、不登校児が本当に増えていまして、ご指摘されたように、市川では本当に手厚い学校側、カウンセラーその他の地域支援、すごく手厚いのですけれども、そこに1つですけれどもやっぱり児童精神科があるかどうか。自分は専門ではないのですけれども、今精神科にはいろんな分野があって、児童精神科というのがあります。

す。

先ほどのお話でもその親御さんとお子さんだけで閉じこもって、それで、いやもうこれはちょっと余りにひどいからと言って精神科に駆け込むというケースもあるのですけれども、そうなるからでは遅い。ですから、今の支援の中に、全員がその児童精神科にかかるという意味ではないのですけれども、その関わってくださっているスタッフの中にそういう、ツールもあるというのをちょっとご理解いただければ、何らかの手助けができるのではと思います。以上です。

## ○田中市長

はい。ありがとうございます。

では続いて広瀬委員よろしく申し上げます。

## ○広瀬委員

よろしく申し上げます。

私の方からは、最初の子どもたちの生きる力の教育と、多様な教育ニーズ対応に関わってお話させていただければと思います。

その柱の一番として第4期の教育振興基本計画、1番目としては、子どもたちの一人ひとりの可能性を引き出す、2番目として学びの質の向上と学びの保障の実現、3番目としてともに支え合う学びの環境整備というところが記されているかと思うのですけれども、ここの1から3つの視点というのは私もすごく共感するところで、柱の1-1から3ですね、こちらで示されている3つの内容というのは従前の何を教えるかというところの教育から、10年後20年後の市川市の社会ということを見据えて、その子の学びの違いというところに着目して、その子ども自身が何を学ぶのかという、教育の考え方の転換というのを意識しているのではないかなというふうに私自身は理解しております。

これは大人が一方向的に考える何かの基準に照らし合わせて、それに見合わない児童生徒を分けて教育するというのではなくて、その子の学びにいかに関わりが深まるか、寄り添えるかというようなところ、そういうところも考え続けながら、可能な限りいろいろな子どもたちがともに学び合える機会を保障することにも繋がるのではないかと考えているところです。

市川市は義務教育学校、夜間学級、あとは市立の特別支援学校、公立幼稚園、しかも公立幼稚園の中には特別支援学級も設けていて非常に全国の中でも珍しい取り組みかなと思っております。本当にすごい様々なハード面が備わっているというところで、すごく充実している市川市ですので、だからこそ様々な取り組みの英知を結集させながら、今申し上げたような教育への考え方の転換というソフト面を、例えば、小中学校の通常学級の先生方なども含めて、いかに浸透できるかというところがこれからの教育を考えるところの鍵でもあるし、あとは委員会の方が果た

すべき役割というのはその中では非常に重要であるかなと思っております。

それに関わって、私自身教育委員としてもしくは自分の職務としてですね、幼児教育によく関わらせていただいているのですけれども、その柱の1で示したこの3つですね、それがすごく具体化されて実現されているなという感じる場面がすごく多くございます。

関連して令和5年12月にですね、通称「はじめの100か月の育ちビジョン」という幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョンというのが閣議決定されているかと思えます。このビジョンの目的というのが、そのすべての子どもの誕生前から幼児期までのはじめの100ヶ月が生涯にわたるウェルビーイングの向上に繋がるというふうに言われています。このウェルビーイングという言葉、私の周辺ですごく耳にするようになったなというふうに思うのですけれども、これは身体的、精神的、社会的に幸せな状態であるということを示していると言われております。本当にその幸せな状態というのが、ここに書いてある生きる力に繋がる影響力というのはすごく大きいなと思っているところです。子どものこのウェルビーイングを社会全体で育てていくということが、この子ども真ん中社会の実現に向けて重要であるということも、このビジョンの中では示されております。

また、次の多様な教育ニーズへの対応と関わってですね、このビジョンの中には次のような記述もございます。特に障がい児については、他の子どもと異なる特別な子どもと考えるべきではなく、一人ひとり多様な育ちがある中で、個々のニーズに応じた丁寧な支援が必要な子どもと捉えることが大切であり、障がいの有無で線引きをせず、すべての子どもの多様な育ちに応じた支援ニーズの中でとらえるべきである。また、心身の状況にかかわらず等しく育ちを保障するために、周囲の環境、社会を整える視点も重要であるというような内容です。これらの文章を読ませていただくと、この市川市内の公立幼稚園に幸いにも伺う機会を多く恵まれまして、本当に多くの園に伺わせていただくことができました。その中で、いずれの園でも子どもたちが没頭できる遊びの環境を整えながら、教師とともにあるという姿というのは、本当にまさに子ども一人ひとりのウェルビーイングに繋がっているなというふう実感するところです。どの子どもも優良な学びとして捉えて、適切な環境を整えて、それぞれの学びを深め、広げるその教育観、展開というのは、私が中心に見ていた公立の幼稚園なのですけれども、これはやっぱり公立民間に関わらず、そして乳幼児期、幼児期、学童期、青年期に、どの時期にもよらず参考に取り入れていくところはすごく多いんじゃないかなというふうに思っている次第です。この公立幼稚園というのが残念ながら今年度6つのうち2園が廃園ということですので決まっているところかと思えます。とても残念ではありますが、やはり今残っている4園というところが非常に質的なところを学ぶというのはすごく大きいなと思っております。

あと、本当にすみません、ちょっと横道にそれでも大丈夫でしょうか。ちょっと聞いた話だけなので真偽がわからないのですけれども廃園になった2園のうちの1園が、分園という形で存続

されるというようなことを耳にしました。その分園に際して入ってくる人数が若干名という、かなり少ない人数でも運営をするという形のことにも耳にしています。幼児教育はやはり集団の意義というものが大変大きいものですので、その辺りの保障というか、どの子どもも教育の対象であり、教育の質の保障というのはすごく大事な部分ではあるかなというふうに思います。

○田中市長

信篤幼稚園ですね。

○広瀬委員

若干名での運営というのは、園にとっても子どもにとっても非常に考えるべき点が多いかなというふうに思っているところではありますので、そのあたりはもし考えていただける余地があるのであれば、ぜひ子どもたちが子どもらしく幼児期らしく過ごせる保障というのをいただくと嬉しいなと思います。

○田中市長

なにかアイデアや理想の形はあるのでしょうか。

○広瀬委員

やはり本園の方が子どもの人数をきちんと確保できていますので、そこから以前廃園になるにあたってということではお伝えしているのですけれども、公立幼稚園は基本的には送迎、車などは難しいということでは言われているということを見ているのですけれども、信篤エリアというのはどうしても幼稚園数も少なくなっておりますので、その本園の方に交通手段が車しかないといった場合はそれを許可していただくですとか、そこに何とか通えるすべての市の何かこう、ちょっと具体的なものが出てこないのですけど。

○田中市長

小学校前に集団生活が学べるようなことが大切ということですね。

○広瀬委員

その辺り特に年長さんのとき2園の中でたった1人、2人しかいないという環境というのは、ちょっと子どもの育ちにとってどうかなというところが懸念されるところです。すいません、横道に大分それてしまったのですけれども、ちょっと気がかりだったので思わずこちらで発言してしまいました。

少し話を戻しますが、公立幼稚園を今度廃園に向かってしまうところの2園も含めて全て拝見させていただいたのですけれども、すごく質の高いというか、すごく子どもたちが生き生きと本当に活動しているところが見受けられて、対象となる子どもも範囲が広いのではないかというふうに考えております。市の説明の中で公立幼稚園の役割で特別支援教育というのが挙げられているかと思うのですけれども、私自身はその教育の質が高いからこそ範囲が広いというふうにも考えているところです。この多様な教育ニーズへの対応の中で、いわゆる特別支援教育という分野がございます。その特別支援教育の分野の中で近年その合理的配慮という言葉がかなり広く使われるようになったなというふうに思うのですけれども、合理的配慮という言葉は、その土台となる基礎的整備という言葉とセットで、使われる用語であると私は理解しています。

市内の公立幼稚園を拝見していると、例えば、その子どもに応じられるちょっと緩やかに組んでいる日課ですとか、あと本当にそれぞれの興味関心を引きつけるような環境ですとか、あと本当に先生が個々の持っている力を引き出すような、さりげない寄り添い方とか声かけというところが、非常に私なども何度見ても勉強になるなと感じているところです。ちょっと一番最初に申し上げたこれからの教育の転換ということを考えるときに、このすでに市川市が持っているポテンシャルというんでしょうか、公立幼稚園の持っている非常に豊かなところ、質の高さに改めて目を向けてそこから全体を逆に見つめ直すというところも視野に入れていただくと大変うれしいなということを思っております。少し雑駁な話でまとまった話をすべきでしたが申し訳ございません。私からは以上とさせていただきます。ありがとうございます。

## ○田中市長

ありがとうございます。

それでは、田中委員、よろしくお願いします。

## ○田中委員

はい。田中でございます。

私は普段弁護士をやっております教育の個別の問題についていろんな知見を持っているわけでありませぬので、日頃の経験を踏まえて感じているところ、大きな視点という感じで、お話しさせていただければと思います。

この令和7年度の教育振興重点施策、施策の一番上のまず子どもたちの生きる力の育成のところでございます。学ぶ力、道徳心、体力、社会の変化に対応する力とありまして、柱との対応は複数ございます。もちろん生きる力という場合には、社会人になっていきますし、お仕事をして、収入を得て、地域と交流しながら生きていくということの土台になるかと思うのですが、そのときに当然、学力の向上であるとか、その一人ひとりが自分に規律を持ってですね、ルールに従っ

て生活していくという、そういう考え方というのは重要だと思います。ただ一方で、バランスという観点でいうと、普段、私が仕事をしているときに接するのはやはり社会生活の中で問題に直面して、相談される方というのが多いのです。これは犯罪でもありますし、少年の場合は非行という形で私も関わる場合があります。また、民事であればいろんな、例えば、騙した、騙されたとか、あとお金のことであるとか、家族のことであるとか、あと健康のことであるとか、いろんなところで社会的な困難に直面した場面で接することがあるときに、日々すごく感じているのは、生きる力の1つの側面として、人に頼る力であるとか、相談する力とか、協力を求める力という、そのこのところというのが結構重要なんじゃないかなというふうに日々感じております。もっと早く相談してくれればよかったのというのはおそらく弁護士が皆言うことだと思います。医師の場合、おそらくいろんな検査の中で、本人が訴えなくても、身体症状、各種検査で原因がわかりますが、どうしても社会問題の解決というのは、本人の訴えというのが、どうしても基本的には出発点になることが多い。その時にこんなことを質問していいですかとかそういうようなことをおっしゃる方もいらっしゃいます。

そうすると結局、生きる力という観点から考えると、当然学力を向上させていくという場面もありますけれども、それぞれの学校生活の中で、例えば自分ができることを頑張るということも必要ですし、できて褒められる、達成感を得るということも重要ですが、できないことでも人に助けを求めて、一緒に解決するという、その経験の積み重ねがもしかすると社会に出たときも、自分ができないことを否定するとか、恥ずかしいというような感覚ではなくて、素直にですね、人に頼るという場面に繋がるんじゃないかというふうにちょっと感じているところであります。そうするとこの柱1との関係でいうと、やはりこの共に支えあう学びの環境整備というのは、できる人同士がより良いものを作るということだけではなくて、いろんなメンバーがですね、1つのことに協力し合って、できることとできないことを補いながら、問題を解決していくという、そういう経験というのを、少しでも積み重ねていくということが、社会に行ったときの生きる力に少しでも繋がるのであるというふうに感じているところであります。ちょっと雑駁な感想ですが申し上げました。

あともう1点これは専門的という形じゃなくて社会人としての経験で言うと、この人生100年時代に対応した生涯学習の充実、これは非常に重要なことだと思っております。実は最近ピアノを習い始めました。全く音楽に興味がなかったのですけれども、コンサートをどこでやってるんだとか、どういう人たちが音楽を楽しんでいるのだろうと興味がわいてくるのです。こういう生涯学習の充実というのは、その時になったときに、充実した環境があるというのは非常に重要だと思います。今、例えばそんなに活動が充実していなくてもどんな分野でいうかとですね、いろんな文化系であったり、運動系のものであっても、広く市民の100年は長いので、いろんな場面でいろんな興味関心が出てくると思います。ですので、この視点というのは常に具体的な

ところという意味ではなくて、重要なものとして掲げていくということは、非常に私としてはうれしく思っております。以上です。

## ○田中市長

はい、ありがとうございます。

それでは駒委員、よろしくお願いします。

## ○駒委員

駒でございます。よろしくお願いいたします。

私はこちらの子どもたちの生きる力の育成、それから多様な教育ニーズへの対応、教職員が輝ける環境の確保、そして市川市が持つ文化資産の活用、保護のあたりについて、幼児教育の立場からお話ができればというふうに思っております。最初に、幼児期の子どもの遊びが学びであるということが、なかなか理解されにくいという現状がございます。そこはまず、その理解が深まっていくと小学校教育との円滑な接続というのができていくのかなというふうに思います。幼児期から小学校以降ですね、学びの連続性を意識したときに一人一人の子どもの資質・能力を育んでいくということで、その幼児教育は、資質・能力に向かうプロセスを大切にしている。ですので、その中で学びの芽生えというものができてくるというふうに考えられると思います。それに対して小学校教育というのは、到達目標を中心とした学習を通して資質・能力を育んでいくということで、子どもにとって、自覚的な学びになっていくというふうに考えることができるかと思えます。

つまり、その無自覚な学びから自覚的な学びとなっていくのが幼児教育から小学校教育だろうというふうに考えられるわけですね。その無自覚な学びとか学びの芽生えを育てているのが、遊びになっているわけです。その遊びを通して、子どもたちは生きる力の基礎を育てているというふうにいえると思います。これが小学校以降の生活や学習の基盤となっていると考えます。

先日、市制施行90周年式典に参列させていただきまして、そこで私初めて行徳神輿を拝見して、すごく感動いたしました。本当に市川市で何年も、お世話になってきたのですけれども、見たことが全くなくて、それを拝見して、これすばらしいなと思って、こういった文化の継承というのを、こういったものを、子どもたちにこう伝えていくということがまず大事だなというふうに思いました。以前、地域での獅子舞をやっているところがございまして、その獅子舞が地域の中を練り歩く様子を見て、子どもたちが園でもやりたいという話になって、園の先生方が、何かこう自分たちのその園の獅子舞ができないだろうかと言って、園の中で獅子舞を作って、最初は園の中で、練り歩くということをしていたのですけれども、そこから何か自分たちも地域を練り歩きたいということになって、それを地域の方と相談をして、実際に子どもたちがお祭りの中で

地域の獅子舞と同じように、地域を練り歩くというようなことを組み立てていくというようなことがあったのです。それはまさに、自分たちで遊びから学びを作っているなど思っていて、地域の文化とか行事とか、伝統を継承しながらも、それを自分たちの園の文化に落とし込んで、そしてそれをさらに地域に返していくとか、そういったことがそれこそ生きる力の基礎になっているのではないかと考えます。

その中で、多様な教育ニーズへの対応といったときに、様々なお子さんがいらっしゃるわけで、その中には国際的なお子さんもいらっしゃいますし、それから配慮が必要なお子さんも多々いらっしゃいますけれども、その中で、遊びを通して、独自性とか共通性を知ることが、私は大事なんじゃないかなというふうに考えています。例えば、フィリピンのお子さんがいらしたときに、フィリピンのサギディという遊びがあるのですけれども、その遊びというのは、日本のわらべうたに、振りの真似とか、いろんな振りを作って、それを順番にジェスチャーしていくというような遊び方をするのですけれども、そういったところで、フィリピンと日本で同じ遊び方があるというような共通性を生み出していく。そういった共通性に気づいていくことによって、それが小学校でも同様のことができるようになって、小学校の中でも、独自性や共通性ということに気づいていくことで、国際理解を深めていくというようなことに繋がっていくのではないかと考えます。子どもたちにとって、できる、できないというような見られ方をするというよりは、できないことに目を向けるのではなくて、それぞれができることに目を向けてそれを育てていくということが大事なのではないかなというふうに思っていて、それが、例えば子どもの興味があるところからこう広がっていくと私は感じています。

例えば、園庭で花を見て、この花は何だろうと言って、それを図鑑で調べたりとかというようなことを幼児教育の中ではよくするのですけれども、それがどんどんどんどん興じていくと、理科の能力を伸ばしていくことにも繋がっていくだろうと思いますし、そうやって、子ども自身が興味を持つことを伸ばしていくようなカリキュラムというのですかね、そういったものが、もう少し進んでいくといいのかなというふうに思っています。

教職員が輝ける環境の確保というところでは、やはり教職員研修ですね、そういったところを中心というふうに思うのですけれども、以前、塩焼幼稚園が公開研をなさったときに小学校と交流で、昔遊びをしていて、そういったところは生活科との結びつきというのがありますし、その参加後に異校種の交流会というものをなさっていて、幼稚園と小学校、それから保育所と小学校というような形で、そういった異校種の交流というのが非常に大切になってくるかなと思うのです。そのときに、公立幼稚園の果たす役割というのが、やはり非常に大きいだろうというふうに考えております。

幼稚園等と小学校が互いに他校種を体験できるような研修ですとか、それから私立幼稚園と公立幼稚園が互いに他施設種を体験できるような研修ですかね、公立の先生が私立の幼稚園に行っ

て経験する、私立の幼稚園の先生が公立に行って経験するというような、実際にできるかどうかはちょっと難しいところもあるかもしれませんが、そういった何か他施設の研修、体験ができるような研修ですとか、それから幼稚園、保育園、認定こども園の方がそれぞれの実践されている内容を体験できるような研修、そういった研修もあるとよりお互いのその資質・能力や育み方の違いに気づくことができ、そしてそれが学びの連続性を支えることに繋がっていくのではないかなというふうに考えております。

昨今ICTの活用というのが言われていますけれども、やっぱり幼児教育の中では、リアルな体験をすることが何より大事だというふうに言われています。だから、デジタルならではの学びとそのリアルな体験というのを相互に繰り返すことによって、深い学びが育まれていくのではないかなというふうに考えています。そのICTにしても、生成AIにしてもそうなのですけれども、進化すればするほど、それは人間が作り出していくものなのですけれども、いずれにおいても子どもが自分でそれを考えたりとか、作り変えたりすることができるような遊びというか余白というか、そういったものが大事になってくるのではないかなというふうに思っています。デジタルが、自分の思いを形にするための1つの手段であるということを踏まえて、デジタルを活用していくということが、大事になってくるかなと思っております。

ちょっとまとまりませんが、以上で私からのお話とさせていただきます。

## ○田中市長

はい。駒委員ありがとうございます。

初めてですよね。はい、どうもありがとうございます。

皆さんの意見を聞いた中で教育長、どのような感想を持たれたか。

まとめ的なお話も合わせていただければ、よろしく申し上げます。

## ○勝山教育長

委員の先生方ありがとうございました。

普段なかなかお伺いできないようなお話をお伺いしました。大変、私どももこれからの参考になるなというふうに思って伺っておりました。

まず山元先生からお話がありましたけども、教員、特に若年層の研修は非常に大事だと思っております。従いまして、私どもとしましては、教育センター機能をより強化していき、しっかりと学んでいただきたいなというふうに思っております。もちろん県費の教職員ですから、県の方の教育センター、こちらの研修ももちろん大事なのですが、長く市川市にお勤めになる教職員でございますので、市の教育センターとしてもしっかりと支えていきたい、このように考えております。

またなかなか教員も時間が取れないというお話がございました。これも国の方では働き方改革の議論が進んでおります。そんな中で、例えば部活動の地域移行などを進めていってですね、教員の負担軽減、さらには子どもたちが多様な部活動ができるようなそういう仕組みというものも考えていきたいというふうに思っております。

大高先生の方からも体力のお話がございました。体力は非常に重要だと私は思っております。実は知徳体とよく言われるのですが、私は体、徳、知の順番じゃないかと常々言っております。やはり健康が大事だろうと。特に市川市は、健康寿命日本一を掲げている都市です。体力の増進ということにつきましては、今後もより推進していきたいと思っております。

併せまして不登校児が増えているわけがございます。これはもう、市川市でも大変重要な課題だと捉えております。ただ全国平均の不登校児の出現率が、小学生が2.2%、中学生が7.8%という値に対しまして、市川市は、小学校は1.7%、中学校は5.7%ということで、国の水準よりはですね、かなり低く抑えられているということがございます。これは山元先生からお話がありましたように、市川市内の学校、それから教育センター、関係機関、こちらの方々の努力のたまものだというふうに思っております。今後、不登校児童生徒が増えているという状況は否めないのかなと思いますけれども、それにしても、私どもとしましては、全国平均よりもきちんと抑えていく。こういう形で、何とか対応して参りたいというふうに思っております。

広瀬委員の方からもお話がありました。ウェルビーイング、これも大変重要な視点だというふうに思っております。

それから市川市内の公立幼稚園、特別支援、これがもう1つの目玉ということになっておりまして、非常に他市からもですね、評価をされてる部分であります。

先ほど、幼稚園の分園のお話がありましたけれども、これは近隣の規模の大きな残っている幼稚園の方と、かなりの交流をさせていただきましてですね、なるべく集団で過ごす機会を多くしたい、このような考えでおります。

田中委員からございました人生100年時代、これも非常に重要でございます。本当に今、平均寿命がどんどん伸びている中で、90歳まで寿命がある方が、男性は4人に1人、女性は2人に1人以上という時代でありますから、まさに人生100年までずっと学び続けられる、そういう環境づくりが必要だというふうに考えております。そういう意味でも、博物館や公民館、図書館の利活用につきましては、私どもも意を用いていきたいというふうに考えております。

駒先生からございました幼児期の学びが非常に重要であると。これはもう全く同じ考えでありまして、三つ子の魂百までと申しますけれども、やはり幼児期の過ごし方というのが、その後の人生に大きく影響を与えるということは言うまでもありません。そんな中で、私ども幼保小の連携というのは、従来から一生懸命頑張ってきたわけでありまして、今後、こういうお話を伺いまして、ますますこの連携の重要性というのが高まってきたなというふうに思っております。

で、この辺は一生懸命幼保と小を、きちっとつないでいきたい、このように考えております。公立私立の幼稚園の先生方の交流、これは十分現行の制度でも可能でありますので、早速取り組んで参りたいというふうに思っております。

また、ICTの活用、これはもう手段であります。この手段をどのように使っていくかということが大事であります。このICTですね、子どもたちが埋もれないようにしっかりとした利活用ができるように、そういう形で私どもも取り組んで参りたいというふうに思っております。

いずれにしても、私は家庭の力が大きいというふうに思っております。教育委員会や学校だけで完結できるような問題ではないということで、私どもも他の部局と一層連携しながら、市川版の生きる力というものを考えていきたい、このように思っております。以上でございます。

#### ○田中市長

はい、ありがとうございます。

私もお話を聞いていて、なるほどと思うところがたくさんありましたが、何点かご質問させていただけるとうれしく思います。

最初に山元委員が「魅力的な授業がなぜできないか」というところからのお話を興味深く聞かせていただきました。

若年という言葉でしたか、若い先生ということが1つあるでしょう。

それから授業に集中できない環境というものもありまして、その2点でしたか。

#### ○山元委員

そうですね。確かにその2点が大きいと思います。

#### ○田中市長

これは課題をいただきましたね。

やっぱり先生が授業に専念できる環境づくり。イベントが多くて、本来の授業に専念できないと。何か私もイベントばかりやって、本来どういふことを市長が考えていなければいけないかというその重要なところが今抜けてしまっているような、何か共通したのを感じました。

それといろいろお話が飛んで申し訳ない。大高委員から興味深かったのは日本、韓国、中国も含めて、現在の人口減少の先には人口がゼロになる。やはりそういう見方で、捉えていくべきなのですか、どのぐらいのスパンのお話ですか。

#### ○大高委員

何十年というかも本当に100年単位かもしれませんが、このままの数字でいけば、そうなります。

要するに、少子化ということで、女の子が生まれなければ子供が生まれない。合計特殊出生率の数字から見ればそのうち、特に今日本も少子化で騒がれていますけど、韓国、中国はさらに重症な状況であります。

#### ○田中市長

韓国、中国が重症な状況で減少していると。アジアがその傾向が強いのですか。

#### ○大高委員

国によっては出生率が維持されています。

#### ○田中市長

大変興味深く聞かせていただきました。

もう1つ、アレルギーについてですね。アレルギーの問題というのが非常に今広がっているのですけれど、その点でお話しいただければ。

#### ○大高委員

1つはやっぱり、先ほどお答えした免疫力が落ちているという点。それから新たなアレルゲン、要するに、新たなアレルギーの素になるものというのがどんどん増えています。それはもしかしたら今までもあったのかもしれないですけど、表に出てこなかったということは多いですね。ただ、今物質もいろんなもの、新しいものが出てきているんで、それがやはり原因の1つになってるんじゃないかと思います。

#### ○田中市長

アトピーのお子さんも増えてますよね。

#### ○大高委員

やはり基本的には免疫力、それからアレルゲンの強さ。アトピーの原因になるものの種類が増えていると思いますし、その場合、重症の場合も増えていると思います。

#### ○田中市長

今、給食無償化を行っています。給食にもこの問題というのは、やはりきちんと対処しなけれ

ばならないでしょうね。

### ○大高委員

昔はやっぱり表に出てこなかったんだと思います。きっと食物アレルギーで、重症例も多分出ていたと思うのですが、まずそういう観点が医療側にも学校側にも、それから、ご本人たちにもなかったでしょう。

今はこういう情報が広く普及しています。この時代きちんとチェックしていかないと、大きな事故に繋がりがかねないと。

### ○田中市長

オーガニックの話も出てくるのですが、これはプラスになるんでしょうか。

### ○大高委員

多分プラスになると思います。悪いことはないと思います。

ただ、見ていると職業ベースの話、商業的な話も関係している。話だけを聞くとすごいいいものだなと思っちゃいますけどね。

### ○田中市長

ありがとうございます。

まだいろいろお聞きしたいことあるのですが、この間市民栄誉賞を、パラリンピックで水泳100メートルのSの12というクラスにおいて銅メダルを取った辻内さんという、昭和学院で水泳をトレーニングされた女性の方と車椅子ラグビーで金メダルを取られた行徳小学校出身の羽賀選手へ市民栄誉賞をお渡しすることができました。

その時私が思ったことは、この方々のみならずですが、神様からの課題を与えられてしまった人達というような思いがしたのですよ。

明確に辻内さんは視力がどんどん落ちていってしまうことと、その壁にぶつかったわけですね。羽賀さんは、もう優秀な野球の選手だったのですが、交通事故で車椅子生活、こういう課題が突然降りかかってきたときに、それでも生きていけるという、いやいや前に進んでいこうとする。前を向けるマインド、それでも前向きに行動できる、そういう力がまさに生きる力なんではないかなというふうに思っていました。

今日委員の皆さん方からお話をいただきましたが、そのようなやはり幼少期から、環境の中で育っていった中に、多分、このような壁にぶつかったときに前を向けるというような思いをですね。彼らはもつことができたんだろう。

同じように、多分私もそうですし、誰しものが、そういう神様からの課題をですね、突きつけられる瞬間というのが、起きてくると思うのですよね。

その時に市川の教育を受けていた子どもたちが、力強くその環境の中で生きていこうと前を向いて自分のできることを見つけ出すというような、子どもが育ってくれる地域であって欲しいなということを強く思いました。

今日委員の皆さん方のお話というのは、まさにそれに繋がる重要な課題というもの。気づきというものをいただけるお話であったと思いますので、教育委員会の皆さん方が、聞いてですねこれをどうやって、令和7年度の教育振興重点施策の中に盛り込んでいけるかということで、努力をしていただきたいというふうに思っております。

今日の会議が生かされるのは、今度は教育委員会の方のキャッチする力、ということになっていきますから、どうぞよろしくお話ししたいと思います。

今教育長以下組織の中でですね、組織替えが私のほうに上がって参りました。

そういう内容も実は皆さん方にお話して、ご意見を聞きたいというふうに思っておりますが、間違いなく子どもたちが、今、皆さん方がお話をしてくださいました、聞かせていただいた内容に向かって成長していける環境をつくるために、教育委員会の組織を変えていくかどうかの判断をしっかりと、その方向に向けて前向きに私も検討していきたいというふうに思っているところであります。よろしいでしょうか。

委員の皆さん何か、これはちょっと少し言っておきたかったのに、言いそびれてしまったことはありませんか。

## ○田中市長

山元先生いかがですか。最初の血液のお話と金星の話は興味深いですね。

## ○山元委員

はい。やっぱり、大人でもあれってこう思いますですね。各教科でやっぱり子どもたちが食いつく、そういうものはいっぱいあるので、先生によって、肺ですとか心臓ですとか豚の臓器を取り寄せて、実際子どもたちに持たせる、触ってみる。これも、先ほどの幼児の遊びと同じで実体験は中学生であっても、とても重要です。一方で、これからの時代のデジタルを活用しながら、見えない世界を自分で思考していくということも大切で、たまたま授業研に参加した際に、その2つが同時に授業展開されていて、こういう姿はすごくいいな、そして子どもたちが本当生き生きしてるな、やっぱり教育の基本はここだよな、みたいに本当に感じたものですから。だからこそ、先ほども申し上げましたけれども、実際子どもたちも、家庭的な面も含めて、いっぱい課題を抱えている。

多分、市長さんいつも気にしてくださいますけれども、格差の問題。生まれ持っているいろいろな格差ももう最初からもちろんあるのです。プラスでもマイナスでも、さらにその社会の中で、経済的格差であるとか、家庭状況の格差であるとか、その全く違う子どもたちが1つの教室の中に30人、40人いるわけなのですね。

○田中市長

今、何名なのですか。

○山元委員

今35人です。昔は50人ぐらいいましたけど、今35が上限なのですからけれども。でも、だからこそ学び合える。さっき言ったようにその弱いもの強いものが助け合うということも学べるし、でもやっぱりその非常に立場の弱い子どもをどうやって、セーフティネットじゃないですけども、次の社会を支える子どもに育てていくか。それって本当に、でも市長さん、私お聞きしたところによると給食の無償化ももちろんその一端ですよ。

お腹が空いてたら、勉強どころじゃないので、プラス何か子ども食堂とかいろいろな無償の提供とかいろいろな工夫してくださっているというのを市民として目にしています。

そういう意味で、本当に教育格差で、ますますその格差が格差にならないために、公立学校は頑張らなきゃいけないというのを日々感じています。

○田中市長

今日のお話の中に格差の問題が出てきて、山元委員ありがとうございます。

時間も限られてますけども、ICTの話で気になったのがジョブズもゲイツも、14歳までさわらせるなど。開発者がそう言ってるという話を聞いてですね。これは、どういう背景なのか。

私たちがなんか便利だから、楽しいからと使ってしまうと、時間をそこに費やしてる姿を、人間形成、精神的な構造というのか、何ていうんでしょうか。

つまり、正しく成長していく過程において、使用する時期を考えなさいという提示を、警鐘を鳴らしていたことは事実でありまして、その辺も学校教育の中で、時代の流れだからということで、その現状を受け入れるということではなく、独自の判断があってもいいのかもしれない。

田中委員のお話の中でピアノを始められたという、すごく笑顔になるお話いただいたのですが、本当に何かこう、気づきというか自分事に係わっていくとかそういう新たな挑戦をしていくというのは、もう人生100歳の中ではこれからも必然といいますかね。

そういう逆に長い人生の中に魅力的な場面というのは中盤ぐらいで、これから起きてくるんだというね、そういうような、人生100年を前向きに捉えていくような、私はそういう自分自身

もそういう人生を送ってみたいなというふうに思っていますね、お話を伺いました。  
今どんな曲を弾いているのですか。

○田中委員

今はベートーベンのソナチネの5番です。

○田中市長

機会があったら皆さん一度お聞きしたいですね。

いろいろよろしいですか駒委員。この点も、私も教育長と同じようにですね、他施設の研修というのは、制度的にできると教育長に言われましたので、ぜひいろんな環境で気づき、学ぶような研修が素晴らしいと思います。

大変すばらしい教育委員の皆さん方のご意見を聞くことができました。

市川市の子どもたちを育てていく環境として、皆さん方のご意見を十分に取り入れてですね、すばらしい環境づくりに努めて参りたいと思います。

今日はありがとうございました。

以上で終了したいと思います。